

---

# 箱庭の調律者

ラヴィエンテ改

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭の調律者

### 【Nコード】

N6955X

### 【作者名】

ラヴィエンテ改

### 【あらすじ】

通り魔によって殺された主人公。

彼はどのような人生をおくることになるのか。開発したスキルを引っさげ、今、箱庭に調律者が降り立つ。

更新は不定期の上処女作です。生暖かい目で見守ってやってください。

**第零話 終わりと始まり(前書き)**

初投稿です。よろしくお願ひします。

## 第零話 終わりと始まり

「人生つてさ、本当あっけなくて、つまらない。

自己紹介が遅れたね。俺は首里道人<sup>しゅりみちと</sup>。某K大学に今年から入学するはずだった十八歳。

なんで「はずだった」になってるのかというと、前の方の文でわかると思うが、殺されたんだ。

ん？文？何言ってるんだろ俺。

いやまさか今日日本中を騒がせてる凶悪通り魔事件の被害者になるなんて思わなかった。

背後からいきなり刃物を突き立てられて殺されるって聞いてたけど、本当だったんだなあ……

血を失うにつれて段々五感が失われていく……

あの感覚は二度と経験したくないなマジで。思い出すだけでトラウマになりそうだ。

まあそんな事（オイ）は置いていて

「どうなってるんだこれ？」

そう、俺はわけのわからない真っ白な空間にいる。

なんか頭がおかしくなりそうだな……

これが永久に続くのか!?

え?死後の世界ってこんなもの!?花畑とか想像してたのに!?!いやこの空間あと一日ぐらいいたら絶対発狂する。

「いやここ時間の概念ないし、本当のあの世ってわけじゃないからな。」

ああそうか。安心した……って

「誰だよ!?!」

後ろを振り向いてみたが誰もいない。まさかもう発狂して幻聴が聞こえるようになったのか?

「違う!上だよ上!」

上を見ると、ジーンズにポロシャツとラフな格好のダンディーなおっさんが降りてきた。

「一体あんた誰だよ。」

「神さ。」

「まあ死後の世界があるんだし今更神が居ても驚かないけど、何で唯の人が死んだくらいで出張ってくるんだ?」

「それは僕の部下のミスで間接的に君を殺してしまったからさ。」

うわあよく読んでた二次創作のテンプレだ。マジであつたんだな……ん？間接的？どついう事だ？

「部下はあの殺人鬼……生前は切り裂きジャックと呼ばれていた男を人間に転生させてしまつたんだ。本当はミミズにするはずだったのに。」

あゝなるほど。死因に関わつてたわけか。しかし超有名人に殺された事になるな。

「そんな風に考えたのは君が始めてだ。」

神が何やら驚いているようだ。

うん。今更だけど心を読まれている事に関して突っ込むべきか？

……やめとこう。めんどくさい

「彼に殺された人はここに連れてきて転生してもらつことにした。」

はい更にテンプレの重ねがけです。本当にありがとつございました。

「ちなみに二次元の世界に行ってもらつけど……後空いてるところが一つしかない。」

「どこですか？」

「めだかボックスという漫画さ。」

比較的平和そうだし、いいか。

「因みに原作ブレイク大いにやっちゃって構わないよ。」

へえー

「因みに特典は七つね。」

「自分で考えたスキルとかでもいいですか？」

「度を越さなければね。」

「じゃあ一つ目は俺の存在を元の世界から消すこと。二つ目は家族が幸せに暮らせるようにすること。」

「珍しい若者だね。」

親兄弟には俺のことを忘れて平穩に過ごしてほしいからな。

「後四つだよ。」

「三つ目は主人公の同級生として十三組に入れること。四つ目は高1の年齢からスタートさせること。五つ目は性別を変えないこと。」

赤ちゃんプレイや女体化なんてまっぴらごめんだ。

「四つ目と五つ目に関しては心配しなくてもいいから残り四つだよ。」

「じゃあーーーーーっていう感じのスキル下さい。」

「本当欲がないね。チートはこれでやっと一つだよ。」

「後エアギアのレガリアを発明できるようにしてください。それとDグレのティキの能力をお願いします。」

「後一つ。」

「主人公と同じくらいの身体能力と脳。」

「これで全部かな？」

「はい。」

「じゃあ転生させるよ。」

神が俺の額に指で触れると凄まじい眠気に襲われた。

神の「第二の人生を楽しんでね」という声を聞きながら、俺は意識を失った。



## 第零話 終わりと始まり（後書き）

主人公のスキルは次回の設定で書かれます。  
タイトルから推理してみてください。

## 主人公設定（前書き）

もう見てくれた人がいることに感動です。

前回ミスがありました。申し訳ありません……

主人公設定ですが、Dグレネタ多いです、

## 主人公設定

### 主人公設定

名前：首里道人

身長：173cm

体重：55kg

外見：エアギアの皇枢を男にした感じ。瞳の色は赤。一（いわゆるアルビノ体質）

年齢：生前は18歳 転生後は16歳

性別：男

異常

？「超律」（チューンナップ）

対象に取った相手のあらゆる調子を最盛期レベルまで引き上げるスキル。異常を対象にすれば、かけられた相手は120%自分の異常を使いこなせる。

過負荷に使う際には更にマイナスにするかプラスに転ばせるか選べる。

プラスにされたマイナスは元々の作用とは逆に働くことになる

例）致死武器スカーレットが他人の生傷を古傷に変えるスキルに変わるなど

また、このスキルの影響で、道人は一度「調律」した相手のスキルの構造を知り、完璧に使いこなすことができる。

？  
ゲットオアスロウ  
取捨洗択

Dグレのテイキの能力に名前をつけた物。あらゆるものに対して触れるか触れないかを選択できる。使い方によっては相手を殺害することも可能な危険極まりないスキル。

例) 壁に触れることを「拒絶」してすり抜ける、相手が「生きていること」を拒絶するなど。

備考：フラスコ計画に参加しており、「十四番目」と呼ばれることが多い。

験体名「神ノ道化」(クラウン クラウン)

交友関係が極端に狭く、十三組の十三人でも知る人は研究を統括している名瀬くらいである。  
サーティンパーティー

他の知り合いはフラスコ計画関連で黒神真黒、日之影空洞、後は昼寝仲間である太刀洗斬子程度。

基本的に自分に興味があることが無ければ最下層のさらに下にある「十四番目の秘密の部屋」にいる。一(部屋に入るには正しいスパコンに特定のデータが入ったメモリを読み込まなければならず、そのメモリは日之影、真黒の二人しか持っていない。

少ない知り合いは大事にする。  
実はツンデレ。

## 主人公設定（後書き）

こんな駄文を読んで下さってありがとうございます。ごさいました。  
ではまた次回までさようなら。

**第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（前書き）**

三話連続投稿です。

## 第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅

首里 side

目を覚ますと、どこかわからない公園のベンチの上だった。

「『知らない天井だ』っていうお約束出来ないじゃん……」

ぶつぶつ言いながら体を起こすと、染めて隠していたはずの白髪がふわりと顔にかかる。カラーコンタクトも消えてしまったようだ。高かったのに……

「ま、この世界ならこのままでいいか。」

そこまで考えて手で取ってを掴んでいたバッグが目が付いた。

開けてみると受験票と完成品の玉璽レガリアとiPhoneと通帳（0が十個ほど並んでいる）が入っていた。

iPhoneを開くとメールが一通来ていた。

「えっと……『無事転生できたようで何より。玉璽レガリアは僕からのサービスさ。使いこなせる様にしておいたから反動とかは無いはずだよ。これを見たら不知火袴の所に面接に行つてね。このアドレスは返信も可能だから、やりとりもできるよ。』……便利だな。返信は後にして袴さんの所に行くか。」

すぐそこに箱庭学園があったので、受験票を見せて通してもらつ。地図で理事長室の場所を確認したというのに、たどり着くまで十分以上歩き続けた。

「はあ、はあ……やっと着いたか。どんだけ広いんだ……失礼します。面接を受けることになっていた首里道人です。」

「ああ、どうぞ。」

入ると腹黒いことを考えてそうな老人が「今失礼なことを考えませんでしたか？」……この人、出来る。

「まさか。そんなわけないでしょう。それより、理事長に呼ばれるということは……何か問題があったってことですよな？」

「いやいやまさか。君に問題などありませんよ。ただ、少し老人の実験につきあっていただけだと思います。」

袴総帥はグラスに入ったサイコロを取り出した。

「このサイコロを振ってもらえ、結構です。自分が異常であることは自覚していますし、コントロールにしています。」……そのアブノーマルを見せてもらえますか？」

「いいですよ。でも……」

俺は立ち上がりカーテンの所まで歩いていく。

「そこで隠れてコソコソしてる方々にはご退場願いましうかねえ！ 『拒絶』 x 7！」

衝撃音が響きわたり、隠れていた十三組の十三人はサーティンパーティ空気の塊を受けて一人残らず失神した。



「全く、盗み聞きなんて趣味の悪い……」

袴総帥に向き直る。

「話を戻しましょうか。」

結構いい笑顔で言っただけ

首里 side out

袴 side

十三組の十三人を全員同時に気絶させた！？

サーティンパーティ

一体どのような異常なのです？

「私の異常は『超律』（チューンナップ）と『取捨洗択』（ゲットオアスロウ）の二つです。『超律』（チューンナップ）は対象者の異常、体調などを絶好調に調整できる異常です。例えば――」

そして私の首のあたりに触れる。すると、みるみる肩こりが治っていった。

「『取捨洗択』（ゲットオアスロウ）は、触れる物を選択できる異常です。さっきのはそれを応用して衝撃波を飛ばしたんです。壁をすり抜けたりもできますよ。」

「……素晴らしい。是非フランスコ計画の中枢である十三組の十三人サーティンパーティに参加してください。」

「構わないですが、いくつか条件があります。まず私がパーティーに参加することは統括者以外には他言無用でお願いします。あ、統括者さんにも口止めしておいてくださいね？二つ目はこのセキュリティシステムを吞んでください。」

渡された書類には色々なシステムが書かれていた。後部屋の要望が。

「わかりました。全て吞みましよう。」

「感謝します。十三組に合格したということでもいいんですね？」

「はい。」

「では失礼。」

そう言うと彼は出て行きました

いやはや。とんでもない拾い物をしましたね。  
フラスコ計画は大きく躍進するでしょう。

袴 side out

首里 side

どうしてこうなった……

今俺は真黒さん（へんたい）に彼の妹、即ちめだかの魅力について延々と講釈を受けている。

「……でね！その時のめだかちゃんの可愛さといったら言葉にでき

ないほで……」

もう一度言おう。どうしてこうなった。

多分めだかの写真を見てにやにやしていた真黒さんにぶつかってしまっただからだろう。

しかし本当妹LOVEな人だな……

名瀬を気絶させたことがばれたらどんな目に遭うか、想像しただけで寒気がする。

それから延々二時間妹講義をきかされ、俺はすっかり弱ってしまった。

「おい真黒。その辺にしとけ。そいつも困っているだろ。」

振り返ると見上げるような大男が立っていた。

日之影会長！あんたサイコーだよ！

「……分かったよ。」

不服そうながら引き下がってくれた。

「ありがとうございます。俺は首里道人といいます。先程箱庭学園への入学が決まりました。」

「面接の帰りだったのか。何組だ？あ、俺は日之影空洞。生徒会長をやってる。」

「十三組です。」

「俺たちもだ。」

「そうなんですか。っと。時間だ。じゃあこれで。」

「ああ。入学おめでとう。」

「ありがとうございます。」

会長に背を向け、歩き出す。

「いい人だったな。忘れるのはもったくない。よし……」

俺は『日之影空洞を忘れること』を『拒絶』してからあてがってもらった寮の部屋に向かった。

**第一箱 実験参加と変態、会長との邂逅（後書き）**

次回はいよいよ入学式です。

- 十三組編まで主人公は介入しません。なので飛ばすかもしれない。  
ん。ではまた次回

第二箱 チート二人との邂逅（前書き）

性懲りもなく投稿です。  
原作キャラと邂逅します。

## 第二箱 チート二人との邂逅

首里 side

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！』

『そんなわけで、本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩みごとがあれば迷わず自安箱に投書するがよい』

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

……このセリフ生で聴くとこんなに迫力あるんだ……

どうも、風の玉璽レガリアを使おうとしたら地面に頭から墜落した首里道人です。

いやちゃんと飛べたんで調子に乗ったら着地に失敗してしまったんだよ。

かなり痛かった……

で、

今生徒総会の真っ最中です。

キン クリ ゾンて便利だね！

いやしかしこの喧嘩売ってるとしか思えないセリフを堂々と言える事に対して尊敬の意を示したい。

相当非常識だよ。

容姿もそうだけど。素晴らしく美人だね。真黒さんが自慢するのもわかる。なんとなく。

この数週間の間、箱庭に入り浸ってたから真黒さんや日之影会長と仲良くなった。後太刀洗選挙管理委員会委員長とも。

オススメの昼寝スポット教えていただいてありがとうございます。理事長が一（正確には名瀬先輩が）三日で時計台地下十四階を作ってくれたため、今はそこに住み着いている。いくらなんでも仕事早くね？

他のメンバーにはばれないよう、光を透過して幽霊のようにふよふよ浮かびながら部屋まで下っている。

もちろん拒絶の扉は華麗にスルーしている。

名瀬先輩に早くかつこっそり仕上げてやったんだから対価をよこせと言われたので、エアトレックを一組作ってあげたら結構興奮してた。

分解して鬼気迫るように構造調べてたからな……

閑話休題。

さて、演説も終わったようだし巢に帰ろう。

体育館の天井から飛び降りる。

十三組の所に座らなかったのは目立ちたくなかったからだ。

風の玉璽レガリア使って天井まで登ってゆったり見物してたってわけ。



さすがにあの生徒会長も発見できなかったはずー

「おい待て貴様」

「うわあああっ！？」

ばれてたの！？どんだけ目がいいんだよ！てかちゃんと演説に集中しろよ！

「貴様の髪は目立つからな。後演説中に見つけたわけではない。」

地の文につっこむなよ！

「それで何の用です？黒神めだか生徒会長？」

「そのローラブレードは何だ？」

「これはA・Tエアトレックー俺の発明品ですよ。」

嘘です。俺が考えたんじゃないです。

「どんな機械だ？」

「空を飛べる靴とを考えてください。」

「興味深いな。」

「用事はそれだけですか？なら俺も帰りますよ。」

「うむ。引き止めて悪かった。しかし今度から総会の時は自分の席に座れ。」

「善処します。それじゃ失礼」

いや〜ばれるとは思わなかったわ。やっぱり超人だな。オーラからして違うし。

さっさと帰って寝るか。

で、

「何故に教室？」

寝た瞬間例の天然チート女がいる教室にいた。

「今何か失礼な事考えなかったかい？」

「まさか。それよりあんた誰です？」

「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は安心院なじみ。僕の事は親しみを込めて安心院さんあんしんいんと呼びなさい。」

「命令口調ですか。で、その安心院さんが何の用です？」

「それは君が欲しいからさ。」

「欲しいのは俺じゃなくて俺のスキルでしょ。」

「ばれてたか。そうだよ。君の異常アブノーマルチューンナップ『超律』は素晴らしい異常だよ。

「

「あげませんからね。」

「僕のスキルと交換する気は？」

「ないです。」

「そうか。もう行っていいよ。」

「諦めがいいんですね。」

「馬鹿言っちゃいけない。諦めないよ。何度でもアタックするぞ。」

「……デスヨネー。」

「ふふっ。」

「じゃあさようなら。あまり会いたくないですが。」

「冷たいことを言わないでくれよ。」

そのセリフをバックに教室から出た。

## 第二箱 チート二人との邂逅（後書き）

marucco様感想ありがとうございます。

PV2000、ユニーク400以上と今日始めたばかりだということに嬉しい限りです。

さて、ここでアンケートを取りたいと思います。

時計台地下の視察のとき、

? ラスボスとして出す

? 静観させる

どちらか選んで感想と一緒に投稿していただきたいと思います。

読んで下さってありがとうございます。  
感想をお待ちしています。

### 第三箱 風紀委員会との殺り合い（前書き）

PV3000アクセス、ユニーク500突破です！

maruco様、投票と感想、ありがとうございます。  
主人公無双です。

### 第三箱 風紀委員会との殺り合い

首里 side

「おい一年。校舎の中で何てもんはいていやがる。校則違反だぜ？  
ケケッ！」

……厄介なやつとエンカウントしちゃった。

今俺、雲仙冥利に絡まれてます。

校舎をぶらつこうと思って珍しく外出したのだが、その時うっかり  
石の玉璽レガリアをはいてきてしまったのである。

そこを雲仙に見つかり、今に至る。

「とにかくちょっと来てもらおうかなあ？拒否権はないぜ。」

「……わかりました。」

周りが同情するような目で見ってくる。そんなに嫌われてんのか風紀  
委員会。

ま、やられるつもりなんて全くないけど

はいていたのが石でよかった。

暫く歩くと教室に着いた。

中には武器を持った風紀委員の人がぎっしり。

「ま、今回は初犯で……全治半年で勘弁してやるよ！やれ！お前ら！」

各々の得物で攻撃してくる。

でも、全て無駄だ。

首里 side out

side 3人称

風紀委員の攻撃はー全て道人の体をすり抜けた。

『なっ！？』

そしてすり抜けた先には当然仲間がいるわけで

「ぐあっ！」

「ぎゃあー！」

「げふっ！」

必然的に同士討ちになる。

「デメエ……何をしゃがった！」

「俺のスキルを使っただけさ。」

「！！異常アブノーマルだったのか！？」

「ご名答。さてこの人たちには行動不能になってもらいますかね。」

道人は緋翠ジエ・ロードの道を発動し、次々と風紀委員を『石』にしていく。

「さて、これで邪魔は入りませんね。」

「っつ、舐めんな！」

雲仙はスーパーボールの弾幕を見舞うが

「こんなオモチヤで俺を倒せるとでも？」

道人は全て掴み取ってしまった。

雲仙も多少焦り始めた。

「（クソ……部下がいるから『灰かぶり（シンデレラ）』は使えねえ……こうなりや『鋼髪アリアドネの糸』を使う！）」

投げられた鋼髪アリアドネの糸はネット上に展開し、接近してくる道人を阻む――予定だった。

道人は雲仙の想像の斜め上をいった。



自らネットに突っ込み、その後急ブレーキを掛けて糸が緩んだ瞬間隙間からジャンプで脱出したのである。

そして彼の蹴りは雲仙の腹に直撃し、そのまま『石』に変えた。

首里 side

「やっと終わった……」

まさかあれが成功するとは思わなかった。

あれは生前見た『エア・ギア』で

南樹が鶴に対して使用していたのを真似たものだ。

「く……そ……」

うわあ凄い形相。

「悪く思わないでくださいよ雲仙先輩。貴方達に正義を執行するだけの力量が無かったのが悪いんです。まあ、この世に正義なんざ存在しませんけど。」

「……なんだと？」

とあるダークヒーロー異能漫画の敵役のセリフを借りよう。

「『この世に正義など存在しない。悪<sup>クズ</sup>の中で最強の者が正義と呼ばれているだけだ』……俺の持論です。」

教室を後にする。

生徒会と風紀委員会が全面衝突する二週間前の出来事だった。

**第三箱 風紀委員会との殺り合い（後書き）**

アンケートもよろしくお願いします。

#### 第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション（前書き）

すみません！本当すみません！

・十三組まで介入させないと言っておきながら……  
今回から主人公が前書きに出てきます。

首「この見通し大甘なダメ作者が！そんなだからテストも悪いんだろ！」

作「仕方ないだろ気が変わったんだ。あ、蒼井宗仁様、maruc  
o様、感想ありがとうございます！」

首「こんな作者の駄文を見ていただいている皆様には感謝してもしきれないです。」

作「扱いひどくね!？」

首「それでは本編をお楽しみください！」

作「無視かよ……」

#### 第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション

首里 side

「……………暇だ。」

どうも、最近風紀委員会を蹴散らした首里道人です。

風紀委員会が敗北したことはどこからか漏れたらしく、生徒の間ではやり過ぎを見かねた学園が送った刺客の仕業だとか、風紀委員会が粛清してきた生徒の怨念が形になったものにやられたとか言われているらしい。

前者はともかく後者はどこのオカルトだよ！

……………なんにせよ、風紀委員会の格は多少落ちたらしい。

そういえば蹴散らしたメンバーの中には鬼瀬、呼子なんかは混ぜられてなかった。

生徒会に関わるからかな？

……………考えるネタすら尽きた。

うん、寝よう。そつだ。それがいい。

時計塔の屋上でも行ってみようかな？

安心院さんが出てきませんように。

首里 side out

人吉 side

放課後、生徒会室に向かおうとしていた俺に、不知火が話しかけてきた。

「善吉いゝ、今箱庭で噂になってる風紀委員会返り討ち事件でどう思っつゝ?」

「何だそれ?」

「ええゝ知らないのゝ!?今かなり噂になってるのに!？」

「教えるよ不知火。」

「教えてください、だろ?」

「……教えてください!」

「よろしい」

……こんなやりとり少し前にもあったよな、確か。

「えゝとね、2週間ぐらい前に校舎の中で改造革靴履いてた奴を雲仙委員長が他の委員と一緒にどっかの教室に引っ張りこんで肅清しようとして返り討ちにあつたつて。保健委員の人が言うには、全員筋肉がガチガチに硬直して『石』みたいになつてたらしいよ」

「はあ！？何だそのオカルト！そいつがメデューサだったとでも！？」

「そいつ髪が白くて目も赤かったって！風紀委員会に肅清された人たちの怨念だつて説もあるよ あひゃひゃ！」

「ますますオカルトじゃねえか！つと、俺もう行くわ。」

「情報料として今度なんか奢ってね」

「わかったよ。」

俺は生徒会室へと急いだ。

善吉 side out

めだか side

私は今生徒会室で善吉を待っているのだから……遅いな。

「悪いめだかちゃん。遅れた！」

丁度来たようだな。

「遅いぞ善吉！たるんでいるのではないか？」

「だから悪かったって！」

「阿久根書記も喜界島会計もとっくに来ているぞ！まあとにかく仕事を始めてくれ。」

「わかった。」

めだか side out

三人称 side

「そついやめだかちゃん。」

「ん？」

「十三組に髪が白くて目が赤い奴いないか？そいつ風紀委員会を返り討ちにしたらしいんだけど。」

「………会ったことはある。確かローラーブレードを履いていたな。  
A・T（<sup>エテ</sup>トレック）という空を飛ぶための発明らしい。」

「『ローラーブレードで空を飛ぶう！！？？』」

「ち、ちょっと待ってください。そんなことできるんですか？」

「推測だが4kW程の出力はあった。ちなみに平均的な原付バイクが3 - 5kWの出力だ。」

「何でももの作ってるの………」

「カツ！、それが十三組ってことなんだろうさ。」



首里 side

「ハクション！うう、誰かが俺の噂してるな……おかげで目が覚め  
ちまったよ。……ん？」

携帯をチェックするとメールが来ていた。神からだ。

『暫くぶりだね。楽しんでるか？』

一応伝えておく。風紀委員会と生徒会が争うのは今日だ。』

なん…だと!？

やばい！急がないと！

轟の玉璽レガリアを使って全力疾走する。

二、三分で生徒会室の窓の外に着いた。  
中の会話が聞こえてくる。

「やめてくだ」

本当ギリギリだ！

何も考えず窓を蹴破って中に侵入した。

首里 side out

善吉 side

風紀委員長の雲仙が来て、火薬玉をばら撒きやがった！

「……やめてくだ「遅えよボケ」

爆発による爆風が届いて気を失う瞬間、白い何かが俺たちの前に立ちはだかるのが見えた気がした。

善吉 side out

首里 side

ふゝ危ない。原作介入のチャンスを逃すところだった。

俺がさつき何をしたのかというと

?窓を蹴破り割って侵入

?善吉、阿久根、喜界島を後ろにかばう

?轟の玉璽レガリアでこちらに来た爆風を吸収して一丁あがり

「貴様はあの時の……」

「間に合ってよかったですよ生徒会長。ではさようなら。」

「待て！せめて名前をな」自分で探してください。それじゃあ。」

窓から飛び降りて逃げた。

わざと生徒証を落として。

**第四箱 本格的な介入前のささやかなデモンストレーション（後書き）**

アンケート、感想ともに入れていただけると作者はのたうちまわってよろこびます。

それではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6955x/>

---

箱庭の調律者

2011年10月20日08時26分発行